令和４年２月８日（火）　東奥日報【２４面】

カメムシ求愛 あの手 この手

森林研究・整備機構森林総合研究所（茨城県）と弘前大学の研究グループは、カメムシの仲間が振動や視覚、触覚、味覚といった４種類以上のシグナルを複雑に組み合わせて交尾前のコミュニケーションを取っていることを確認した。米科学誌「エコロジー」が１月21日に研究成果を掲載した。

森林総研・弘大発表

複雑な求愛行動は、主にヒトをはじめとした哺乳類や鳥類の専売特許と考えられてきたが、この研究により、無脊椎動物の昆虫の中に、より高度な情報利用を行う種がいることを証明した。

ダンス下手で振られる雄も

カメムシは亜熱帯林にすむナナホシキンカメムシ。雄と雌が互いに振動し、雄が雌の前で情熱的なステップを踏むなどの求愛活動が知られてきたが、研究により味覚も利用するなど、やりとりする情報が見かけよりも多彩なことが分かった。観察した全てのペアが同じ動きをほぼ同じ順番で行い、交尾に至ったという。所要時間は平均16分。

弘大農学生命科学部の山尾僚准教授は「雌が雄を選ぶのが慎重なため、雄のダンスが進化したのかもしれない。ダンスが下手な雄は振られることもある」と話した。

（福士和久）

上記の画像は，当該ページに限って”東奥日報”が利用を許諾したものです。無断転載はできません。